

全日本マスターズ スタンド沸かせた女子アスリート

いよいよ師走。1年の締めくくりの月がやってきた。マスターズの皆さんにとって、今年はどうなシーズンだったのだろう。良かったのか、それとも……。本誌の表紙は1月号。今シーズンはともかく、新しい年の巳年がマスターズにとって、“すばらしい年”になりますように。京都で開催された全日本マスターズ陸上選手権も今月が最終章。スタンドを沸かす活躍をした選手をピックアップ。

往年のヒロインを交え 6人で争ったW60・800m

W60・800mのエントリーは6人で、棄権者なしで争った。トップでフィニッシュしたのは岩村直美さん（62歳・東京）で2分47秒93が優勝タイム。

2位に入ったのが2分53秒68の深尾真美さん（63歳・大阪）だった。深尾さんといえば、陸上ファンの方なら記憶に残っているはず。1976年の第60回日本選手権に大阪・吹田六中の生徒として出場、800m 2分10秒7、1500m 4分33秒5でともに2位を占

めた。

高校は大阪・薫英高へ進み、高2のときは第62回日本選手権の3000mに10分07秒3で3位に食い込んでいる。この1年前の高1では1500mで4分30秒7を記録して2位に。このときに1位となったのが滋賀・水口東高の脇畑留美子さんだった。Vタイムは4分29秒7。

歳月が流れ、第45回全日本マスターズ大会のW65・800mに深尾さんと一緒にレースを走った奥村留美子（64歳・滋賀）さんが、この脇畑さんだ。同レースでは6人中の6位。タイムは4分04秒60だった。

話を元に戻すと深尾さんは1500mで脇畑さんに次いで2位になった77年の高校1年時、3000mでは9分47秒3の日本新Vを遂げている。大体大に進んでからは80年の日本インカレ1500mを制したり、85年の神戸ユニバーシアードではマラソンで日本勢で全種目中、唯一の優勝を遂げ、感動のシーンを演じた。

これほどの実力者だった深尾さんが、今春の4月に太ももの裏に痛みが走り、これが尾を引き練習も思うようにできず、今季2試合目となった今大会では「完走することだけを目標」に臨んだ。今後のカムバックに期待。

一方の奥村さんは高校時代の77、78年にインターハイの800mで2連勝している。高3の78年には第8回アジア大会の代表に選ばれ、1500mで

4位に入った。大体大に進んだ年の79年には800mと1500mで日本インカレの覇者となった。年は流れマスターズへは30代の終盤から。レースでは「大好きな800mをずっと走っていたい。マスターズならそれが実現できる」と今回が「25年連続の出場」だった。

再度、深尾さんだが、この人も学生のときに第10回アジア大会の10000mに出て4位入賞だった。現在、二人とも勤めている。奥村さんは、看取りができる地域・組織づくりプロジェクトのメンバーとしても活躍している。

W70の800m、1500mは 藤江美知江さん(70歳・千葉)

初日に口火を切ったW70クラスの800mと、2日目の1500mで日本新のアナウンスを場内に響かせたのは藤江美知代さんだ。千葉の所属で70歳。

まるで古希を祝うかのように、800mは3分02秒90の快走で、3分04秒96の日本記録を更新。大会記録の3分12秒80は9年ぶりに書き替えられた。

1500mは大会前に藤江さんが6分19秒33の日本記録を出していたが、さらに古都のトラックで6分08秒79と、一気に6分10秒を切る日本新を！大会記録にいたっては6分24秒58だから、何秒縮めたのか。こちらは12年ぶりに書き替えられた。

1500mで藤江さんに次いで2位に



コロナ禍で大会が開催されなかった3年間を含めて、四半世紀にわたって全日本マスターズに出場している奥村留美子さん。写真は2017年の東近江元旦健康マラソンのときのもの（ご本人提供写真）

入ったのは、6分59秒65の松村政子さん（73歳・大阪）だった。松村さんは3000mのタイトルを14分48秒51で取ったランナーだが、同種目の日本記録保持者らしい実力を発揮した。この松村さんが1500mにおける藤江さんの走力には脱帽した。

また、W65クラスの中距離では中山淳子さん（66歳・愛知）が順当勝ち。というのも中山さんは800m 2分45秒03、1500m 5分28秒25の日本記録保持者。全日本マスターズでは日本新とはならなかったが、800m 2分47秒45、1500m 5分38秒29と2種目とも大会新での好走を見せた。旧大会記録は800mが2分48秒08で10年ぶりに破った。1500mは昨年自身が出した5分43秒33を書き替えた。

北の大地の樋渡久子さん(76歳) お孫さんの声援受けハッスル

北の大地の北海道から京の都にやってきた樋渡久さんは76歳。W75クラスの100mと200mを楽しんだ。

100mは17秒38（+1.4）で、200mが40秒16（-1.8）だったが、2位が100m19秒75、200m51秒31だから、樋渡さんの走力が分かるというものの。だが、両種目とも日本記録や大会記録には届かなかった。「体調は悪くもなかったけど、それぞれ記録を持っている人がすごい人ばかりで。とても追い付けなかった」と、明るい声で。

そして「昨年の山口大会では75クラスになったばかりで、100mは17秒77（-0.3）だったけど、200mが38秒19（+0.9）で走れ、気持ち良かった」と笑いながら話す。

樋渡さんは「ちびっ子陸上教室」を開いて今年2年目。集まるのは週2回。平日の午後4時から2時間ほど子どもたちと汗を流す。走る場所は道路の70mを利用して、長い距離では800mを折り込んだり。

「北海道の冬は雪が深いので、冬の間はスキーでも」と言い、今大会の京都

には神奈川大にいるお孫さんが新幹線で応援に駆け付け、ゴール付近で大声の「がんばれ！」という「声援をもらってうれしかった」と、にっこり。

W65・100m、200mを制した 高橋葉子さん(65歳・神奈川)

W65クラスのスプリント種目では、高橋葉子さん（65歳・神奈川）が熱い走りで100mと200mを制勝。100mは14秒65（+1.5）の日本新、大会新を出し、200mでは31秒68（-4.2）のタイムで勝った。

高橋さんといえば、W65クラスの60mで9秒18、100mの14秒86と2種目の日本記録を持っているスプリンター。さらに京都では100mで自己の日本記録を書き替えた。200mは4m超の向かい風を押してのタイムだけに評価される。

高橋さんについては古都のレースだけではない。全日本マスターズ大会の前、10月14日にあった地元の神奈川マスターズ大会の100mで、今シーズンのベストとなる14秒49をマーク。さらに、である。11月9日の東京マスターズの競技会では14秒63と、14秒49には及ばなかったが、14秒86を上回る日本新だ。

また、60mにおいてもある競技会で、9秒18を上回る「9秒16、9秒09と2回、日本新を出しました。全日本マスターズ大会を含め、今年はいいシーズンでした」と笑顔で締めくくった。

投てきの嘉成俱子さん(83歳・兵庫) 砲丸投、円盤投で突出の実績

投てきといえば、この人。嘉成俱子さん（83歳・兵庫）だ。砲丸投ではW35クラスで12m07の日本記録をはじめ、後はW60まで飛ぶが、W65、70、75、80と各クラスの日本記録を持っている。円盤投はW65クラスの29m42から、W70、75、80の日本記録を持つ。

現在のクラスのW80の日本記録は

砲丸投が8m86（2.0kg）、円盤投は23m31（0.75kg）。ところが今大会の突き出しでは4回試技中の最高が7m50、円盤のスローイングは18m87と2種目とも日本記録どころか、大会記録の8m48、20m17にも届かなかった。

なぜ？ 嘉成さんの実力からすれば考えられないことだ。なぜかといえば、日本記録を多数持っているからだけではない。世界マスターズ大会で日本人の女性が投てき種目で入賞するのは至難の業。だが、嘉成さんだけは世界マスターズ大会においても入賞を果たしているのだ。毎回参加しているわけではないが、2018年にスペインのマラガであった世界マスターズの第23回大会では、W75クラスの投てき種目に出場。砲丸投と投てき五種競技で4位、円盤投では2位、ハンマー投が7位と4種目すべてに入賞した。

今年8月にスウェーデンでの世界マスターズ大会に久しぶりに出てみたが「寒くて、寒くて。身体がどうかなりそうで、力を出せなかった」と話したが、そのときの不調が翌月の京都まで尾を引いたのだろう。

嘉成さんの旧姓は今岡。日大時代の1965年には砲丸投14m71、円盤投47m46で日本ランク1位に。卒業後、住友金属で実業団の競技会でも活躍した。

嘉成さんは「2年後には85歳。この年の世界マスターズ大会にはW85クラスなのでがんばります」と力強く語った。



女子の最高齢者は91歳の山田恵美子さん（東京）。円盤投とやり投のW90クラスに1人登場し、0m59、1m28を投げて楽しんだ。やり投は1回目に1m05だったが、4回目に1m28を。円盤投は1回目の0m39から0m33の後、ベストの0m59と調子を上げた。拍手を浴びた最高齢の山田さん、お疲れさまでした。